

千葉大学医学部同窓会報 第80号 題字 鈴木五郎

編集兼発行者

千葉大学医学部

るのほな同窓会報編集部

〒280 市葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係気付

電話千葉(0472)22-7171内線2038

かわり行く亥鼻台

— これからの —

キャンパス構想など

4月6日午後2時、満開の桜の花に囲まれて赤い煉瓦の屋根が昔と共に崩れた。それから三時間たった夕陽の中には桜と夏柑柑の木だけがあつて木造二階建の旧看護学校の姿はなかった。その昔、暗暉寮としてナース達の生活の本拠であつた建物はこれで完全に消えた。その目と鼻の先では、地上五階、塔屋二階、四、二〇〇平米建築面積八二九平米の「千葉大学医学部附属動物実験施設」の建物、すなわち動物舎というにはあまりにも大きな動物病院が十月頃の完成を目指してこの日も着々と空に向って伸び進んでいた。旧附属病院が基礎医学・臨床医学の研究棟となり、「医学部本館」の名で活動を開始してより二年近くが過ぎ、学生のための講義室、実習室を完備した不沈戦艦のような「田の字」の建物は、今や教育と研究のための城としてたしかに成長している。これら一連の動きは、るのほなキャンパスに関する五ヶ年計画の線に沿って進められているものであり、いわゆる「第二臨調」ムードの中で各種の困難を越えて一歩一歩と建設が進められているのは驚きでさえある。人さまであるから、この種の変貌に多少の批判や不満を口にする者もあるが、文化の方向とは現実に確かに物を

作り出すものであるとすれば、この原動力は、やがて7月末をもって共に任期満了となる香月学長、井出医学部長を中心とする努力にあつたことを素直に認めるべきである。国家予算削減の方向であり、大学、また医学部としても管理者交替の年であるが、るのほな地区の整備問題は基本路線の如何にかかわらず新しい五ヶ年計画の立案、その先の見通しと次々に建てなければならず、長期計画委員会(委員長・井出医学部長)は教育・研究体制の改善にも配慮しながら休まない活動を決意しているとみられる。

去る2月26日の同窓会常任理事会、3月9日の長期計画・環境保全合同委員会、3月23日の教授会等にて村山教授(長期計画委員会・副委員長)から説明された新五ヶ年計画の案を要約すると次のようになる。

B地区は目下の五ヶ年計画では図書分館予定地となつてR1総合研究施設(R1センター)をここにの希望が強い。ただし、規模の縮小が可能ならB地区への設置も考えられる。体育館が予定通り建設されれば大学会館が撤去されるのでその跡地(C地区)に新・同窓会館(★印)を建て、凡秋谷周辺の環境保全をも行なう。

なお現在の同窓会館もなるべく補修して残し活用する。D地区には看護学部より女子学生寄宿舎の概算要求が出されている。なお旧精神科の建物は改修の上、学生の各部活動のためのサークル会館(仮称)として既設の男子学生寄宿舎(雄翔寮)とあわせて運用を考える。医学部本館前庭、連絡道路周辺の整備を推進する。また年間一、

千葉大学亥鼻地区配置図

動物実験施設(建築中)、体育館及び学生サークル会館(仮称)(共に計画推進中)等が完成し、大学会館その他の木造建物が撤去された時を予想し、そのあとの様にキャンパスを整備するかを考えるための資料。

(医学部・長期計画委員会案)

- ※57. 2. 26 同窓会常任理事会
- ※57. 3. 9 長期計画・環境保全合同委員会
- ※57. 3. 23 第六回教授会



- | | | | | | | | | | |
|-------|------|---------|------|---------|-----------|-------------|------|----------------------|-----------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| 医学部本館 | 附属病院 | 現在の同窓会館 | 看護学部 | 現在の図書分館 | 医学部附属看護学校 | 技師学校及び助産婦学校 | 記念講堂 | 医学部附属動物実験施設(動物舎、建築中) | 男子学生寄宿舎及びサークル会館 |

- A地区 体育館(○印、建設予定進行中)、図書分館(三階建・計画検討中)医療情報センター(附属病院よりの概算要求として計画)
(医療情報センターの建設地は未定であり、A地区にも考えうということ)
- B地区 RI 総合研究施設(いわゆるRIセンター、地上六階地下一階建をRI委員会検討中)またはB'地区へ。
この地区は現在の五ヶ年計画では一応図書分館の予定地とも考えられている。
- C地区 新・同窓会館の建設地として同窓会員よりの声が多い(★印)
(体育館の完成を予定しての話で昭和59年以後となろうか?)
- D地区 女子学生寄宿舎(看護学部よりの概算要求事項、医学部女子学生をも考慮)新・同窓会館の建設を特に急ぐ場合は、現在の会館を壊しその跡に建てるしかない。

なお、先々のことになろうが大学院医学研究科「総合研究センター」(仮称)を生物活性研究所との合同建物として、長期計画委員会で試案を作っている。建設予定地はA地区。

三度の使用状態であり、音響効果の悪さで常に不評、冷暖房も今や不能の記念講堂についてはその取扱いにつき徹底的検討をすることになるであろう。

昭和56年度千葉大学卒業式

るの は な 同窓会新入会員

歓迎会・謝恩会開催

昭和57年3月23日千葉大学卒業式が千葉公園内体育館で開催され、その後医学部卒業生は医学部大講義室で卒業証書授与式が、医学部長、多数の教官、父兄出席のもとに開催された。卒業生一人一人に井出医学部長より卒業証書が授与され、その後、諸君は今日めでたく卒業したが、医師としての研鑽はこれからである云々の医学部長訓辞があった。

続いて午後6時より市内ニューパークホテルにて卒業生ならびに同窓会共催の謝恩会、歓迎会が開かれた。この席にも香月学長、井出医学部長、渡辺病院長ほか多数の教官、父兄の参加があった。香

クラス会だより

三一会 (昭和6年卒)

五十周年記念

クラス会

昭和六年(一九三一年)卒の私達は、今年で満五十周年を迎え、一口に五十年といっても、長くあり、また瞬目の裡に過ぎ去った歲月でもあった。級友の多くの方から記念の級会を催そうという事で、去る十月十三日千葉グランドホテルに会した。



が結核で早逝し、卒業後も何人かは結核で晩年に至り、今後は稀れ

月学長の含蓄のある祝辞、井出学部長は部長としてまた同窓会副会長として、諸君は好むと好まざるに拘らず、るの は な 同窓会会員であるという誇りを持って欲しい云々、という例によって名調子の祝辞、渡辺病院長も先輩として、昔をふりかえりつつ心温まる言葉の祝辞を送った。卒業生に心に残るものが多々あったかと想像される。同席した教官は誰しも、自分達の卒業した時代をふり返りながら、時の流れを感じたことと思う。また出席した教授は全員壇上にあがらせられ、記念品と花束を贈られ、盛會裡に会は終り、早春の夜の巷に散って行った。

にみる幸運な級で、一人の欠けた人もない。

ちなみに、前後の級の現存者を書き出してみると、私達の一年以上四回卒21名、五回卒27名(昭和六年卒)、六回卒29名、七回卒17名というように現況である。

当日は、私達の恩師のただ一人の佐々先生(91才)るの は な 同窓会名誉会長鈴木五郎先生(81才)るの は な 同窓会長小林金市先生(第七回卒)千葉大学医学部長井出教授、御四方の御臨席を添えうし、時の経つきを忘れて過去現在の話がつきなかつた。そして満五十五年、更に満六十年の記念級会を期して、翌十四日は、千葉見物をして春の家で中食をして別れた。

佐々先生の91才の御健在を思えば、更に十回、十五回の級会も夢ではない。

明治生れは総人口の割にも満たぬようだ。知らぬ間に稀少の部にのし上った。早逝された多くの友人達が今日元気だったなら、齢を重ね、それぞれの風格で私達の目の前に現われ、一別以来……などの挨拶を交わすことが出来るだろう。そして宴の賑わいの終るのを待って、別室に待機されている様な錯覚さえも味わった。勿論なくなられた恩師達も含めて。

佐々先生の卒寿は望むべくもないとしても、鈴木五郎先生の81才は指呼の間にある。当分は周囲を煩せながら、級会を重ねるに相違ない。

当日出席者 順不同 ○印同伴
○百瀬孝男、○大塚三八雄、○門

脇富治、○川瀬春雄、○近藤素生、○池田脩三、○竹内勝、○長内健三、○筒井栄、三輪清三、岡谷勝利、大野俊雄、鈴木孝輔、富田恭、佐藤保雄、その他出席予定なりしも欠席、宮内義之介、高村勝、加藤一。(文責 筒井)

昭八回 (昭和12年卒)

クラス会

昭和12年に千葉医科大学を卒業した80名のクラス会を昭八回と申します。去る3月22日新宿景雲荘新館にて五年ぶり(卒業後45年)に現在45名中24名が集合し、楽しい一時を過ごしました。私共卒業後45年を経過し、大方70才前後の年齢になり、昔なら大方この世から



去つて居るでしようが、曲りなりながら何とか生かして貰って、人生を楽しく居られることは誠に幸せです。医師は自分の生活の指導をする事が仕事でないでしようか、健康に十分気をつけて生活し

て行こうではないかと語り合いました。なお同級の藤縄謙蔵君は3月6日脳出血で他界しました。御冥福を祈ります。(稲生芳文記)

三一会 (昭和31年卒)

クラス会

卒業後25年を記念して、川喜田愛郎、小林龍男、中山恒明、松本胖先生の四名の恩師に御出席いただき、東京女子医大の遠藤光男、小林誠一郎君の幹事のお骨折で、東京新宿の玄海別館で、昭和56年5月9日にクラス会を開催した。



恩師の先生方の変らぬ若々しいユーモアに富んだ含蓄のあるお話を伺いしたあと、第一線の医師として勤務医として、また大学の教官として活躍している40名の出席者会員の近況報告がなされたが、かつては人生50年といわれた50という齢の大きな人生の節目に到達した同級生の各人が、自分の生活の姿と心境を述べてくれて大変感

山紫会 (昭和34年卒)

卒業20周年記念

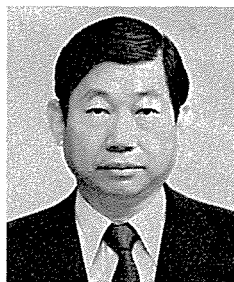
アルバム完成

本集は山紫会(昭34卒同級会)の卒業20周年を記念して刊行されたアルバム集(B4変形版、百六十四頁)である。一枚一枚に各自の仕事の写真、御家族の団圓の様子、旅行のスナップなど数枚のカラー写真を中心に現況を伝える文章が添えられており、一読、時を忘れさせる楽しい記念アルバムとなっている。卒業後20年も経つと、クラス全員が揃って何かをすることは至難のわざであるが、この会は79人全員が一人も欠けず、20年間交友を続けており、本記念アルバムにも全員が写真と文を寄稿したという。本会がいかに友愛に富んだ素晴らしい人々の集りであるかの証であろう。

なお、山紫会では卒業20周年を記念し、大病院前広場に百合の樹を植樹された。この樹が大本となる20年後に再びアルバムを刊行する予定との事。ぜひ、全員揃って今回にも優れた立派な記念集を刊行されることを望み、かつ、山紫会諸兄の今後の御発展を期待したい。

第二微生物学講座 小林章男教授新任

(昭和31年卒)



この度、微生物学第二講座教授にご推挙いただきました小林でございます。浅学非才ではありますが微生物学発展のために尽したいとぞんじております。よろしくご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

微生物学には基礎微生物学と、臨床微生物学があります。前者に關しましては第一講座の桑田教授のもとに、かくかくたる業績がなされております。しかし後者においては、欧米では盛んであるにもかかわらずわが国ではほとんど手がつけられていないのが現状であります。

私は十五年間病院検査部でつぶさに病院での微生物感染の実態を見て参りました。ご承知のように現在病院では、全身的・局所的に感染防御能の減退した患者で満ちております。これら患者の微生物学的管理・研究は誰が行わねばならぬ急務と考えます。かつての赤痢・サルモネラの時代より一層微生物学研究が要求されております。

大学草創期の友人を偲びて

筒井 栄 (昭和6年卒)

去る五十六年五月二十四日、千葉大学草創期の友人を追悼するため、の座談会が都内葛飾、柴又の川甚にて行われ、筒井栄氏(昭和6年卒)より次の寄稿を頂いた。

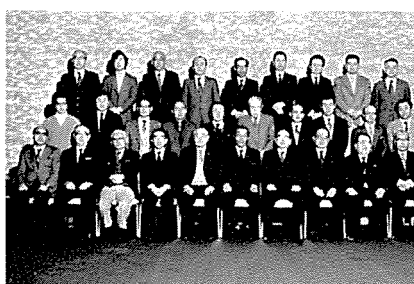


千葉大学医学部は大正十二年大に昇格以来既に半世紀に余り、その後千葉大学医学部と改まり発展の一途をたどつて来たが、今日草創期のいろ／＼な出来事は文献以外にはたどるべきがない。勿論それは当然の事であるが、草創の期に於ける正史に残る筈はなく、むしろ学校の歴史としては忘れてはならぬ数々の出来事のうち、それぞれ不幸な事だめの中に散つて行つた何人かの友人を追悼する座談会を催した。この人達は後世に名を留めた人達ではなく、強いて言えば光輝ある大学誌の陰翳の中で没

連がりやすく、耐性菌出現に關係してきます。この現状把握と合理的な抗菌剤使用法も大きな課題と思われます。

これら課題は大きく、行うに難かしいことは私の十五年の体験から十分痛感しております。基礎、臨床医学の暖かいご支援をこい願う次第であります。

微生物第二講座は新設であり、設備・人員とも十分とは言えません。地道に第一歩から踏み出さねばと覚悟しております。よろしくお願い申し上げます。



安房の雨、一時頃か
した人達だ。ヒューマニティを主
題とした歴史を記述するならば必
ず一章をさしつらえて然るべき人々
である。機会があれば列伝に残し
たいがここでは割愛せざるを得な
い。

毎年2月に開催する事が恒例に
なつた安房の雨のな会は、本年も
2月17日(水)に、まだ一度もお
いで頂いた事のない石川清文教授
中島博徳教授、村山智教授の三先
生をお迎えして、館山市海幸苑で
開催された。(出席会員28名)

石川・中島両先生には専門分野
の講演、村山先生からは、学長選
挙の事から同窓会館建設に至る迄
微に入りお話を伺った。今年の一
月で満八十才の誕生を迎え、益々
元氣な関谷正一會長(大13卒)か
ら、同窓会館建設には全面的に
協力したいとの発言があった。

当会の長老では、鈴木孝輔(昭
6)、白幡静夫(昭13)の両先生は
元氣に出席したが、夜間外出をあ
まりなさらない川名正義(昭5)、
安藤建治(昭6)の両先生、及び

ら始めて時間の経つのを忘れて一
人一人の想い出、また話す人々の
私観を披露して饒郁たる半日であ
つた。会が果てて後、追悼会にふ
さわしい小雨の中を近くにある青
戸の中島辰猪君の分骨した墓前に
詣で散会した。

この会を機会に戦争や戦災で不
幸な一生を果てた人、正史の陰で
千葉大学医学部を盛り立てて来た
人々、同窓会の名簿の版が改まる
度に鬼籍に移された友人達を追悼
する集が多くなることを祈念し
て止まない。その告知板として本
同窓会報が利用されるならば、更
に親しみ深く、場合によってはそ

の様な機会に思いもかけぬ人に逢
う機会もあるのかと思う。

当日とくに追悼慰霊の話題に上
つた人は、中島辰猪君、鹿島宗逸
君、大行慶雄君(昭5卒)、肥後栄
吉君、福田金三郎君(昭7卒)、石
倉豊吉君、富田道也君、本村秀継
君、所沢政夫君、山中克己君(昭
8卒)、芹田広海君(昭9卒)、鈴木
大君(昭10卒)であった。また、
当日の出席者は伊藤行男(昭5卒)、
池田脩三、佐藤保雄、筒井宗(昭
6卒)、小林竜男(昭7卒)、千葉保
之(昭8卒)、菱沼達也、小日向勇
次(昭9卒)、蔵彰(昭12卒)であ
つた。(敬称略)

10数年闘病生活を続けている田村
利男(昭7)先生は欠席された。

又、安房の雨のな会々員が中核
となつて運営している安房医師会
病院(副院長、磯山健一・専20、

安房の雨のな会

57・2・17 館山にて

島にきたおかげで、私は人間と
しての喜びを知り、医師という仕
事の重さを教えられもしたと著者
は述べているが、本書は沖繩の離
島における医療の実情をあます所
なく伝えている。

島民の純朴さ、やさしさに支え
られ、離島で診療する医師の喜び
と苦しみ、そして悩みが、全篇に
みぎついている。僻地医療の現状
や課題を知る意味でも一読に値し
よう。 サイマル出版会(H・N)

書評 沖繩の島医者 ある離島での記録

藤江良雄著

著者は、現在沖繩県医療福祉セ
ンター診療所長であるが、千葉医
大附属医学専門部を昭和26年に卒
業後、札幌医大小児科を経て、昭
和38年無医地区派遣医師団の一員
として、沖繩の離島伊名名診療所
にただ一人の医師として赴任し、
17年間の長きにわたり僻地医療に
つくされた。

この間に経験し、感じたことを、
そのつど書きため、それに若干の
加筆をしてまとめたのが本書であ
り、離島における健康な村づくり
と島民の生活・文化の向上に献身
的な活動を続けられた著者の貴重
な記録である。

小谷庸・専24)は、第三内科稲垣
教授、第一外科奥井教授の全面的
な御援助を頂き地域医療或いは健
康教育で大切な実績を挙げ、日
本医師会や自治体から注目されて
いるが、今後共母校各教室の絶大
な御支援をお願いする次第です。
(青木謹・昭36)

ま こ だ ま 三橋公平(昭和22年卒) 並びに道内同窓会員の動向 札幌医科大学の紹介

(一) 札幌医大の紹介

札幌医大の前身は、昭和廿年に設立された道立女子医専である。戦後大学昇格の可能なA級医専として認められながら、昇格の機会を失って、在校生の卒業と共に廃校される運命にあったが、戦後日本の復興のためには、我が国における最大の宝庫である北海道の開発が必要であり、このためには北海道に医科大学の新設が望ましいという、当時の校長、大野精七先生はじめ多くの人々の努力で、遂に道立女子医専を基盤として、昭和廿五年新制医科大学の第一号として発足した。開学当初は、入学定員は四〇名であったが、学生定員は漸次増加し現在は百名となった。



附属病院は現在、北海道における最大の千二百の病床数をもつ病院で、医学の教育、研究の場であると共に、北海道の地域医療のセンターとしての役割も果たしている。この役割を更に完全に実施するため、二百億円の巨費を投じ病院改築が実施中で、二年後には新病院に移転の予定である。

附属施設としては、癌研究所、臨海実験所のほか、パラメディカルの教育の充実を期し、現在の衛生学院(看護・臨床検査・歯科衛生士助産科)の他にOTPTの養成のための医療短大が昭和五十八年より開校の予定である。

三橋公平(昭和22年卒)

教授には解剖学の三橋(昭廿二年卒)と産婦人科の橋本教授(昭和廿四年卒)が居る。両教授とも教育・研究に熱心であり、学内の信用も厚く、大学の各種管理職を歴任している。三橋が昭和卅四年医大着任当時はすべての教授は東大と北大出身者のみであったが最近は大出出身者が教授に就任し学閥の色は少い。

(二) 同窓会の動向

かつて道内に医薬学の教育機関がないこともあって、同窓生が道内各地で医薬や薬業を活躍に行っていた。従って同窓生は、北海道医師会や北海道薬業界の一大勢力であった。殊に道内の大きな薬問屋の創設者は殆んど薬学の卒業生である。同窓生の教授は札幌医大の二名のほか、旭川医大に耳鼻科の海野教授(昭和卅三年卒)が居られ、着任後多くの教室員を集め、旭川医大の看板教授の一人である。数年前北海道薬科大学が新設され、湊名誉教授が学長として赴任され、教授として薬学の卒業生が四名居られるほか、薬学の卒業生が助教教授以下にも数名来任された。小樽市の市名長と謳われた安達与五郎支部長(大正五年卒)の逝去をはじめ、ここ四、五年の間に各地で大病院を経営していた先輩の死去が続き、同窓生は遂に卅名を割る廿八名となり薬学関係者を含めても四〇名に達していない。

北海道は本州方面と異なりまだまだ医師不足の地域が多く、同窓生のような優れた人々の活躍する余地は充分残されていると考えられる。奮って御来道され、我々と共に北海道の未来を一杯やりましょう。数年前までは毎年開かれた同窓会も、会員の減少と高令化で、三、四年に一回となつていく。若い同窓会員の御来道、御入会を切に望んでいる。

防衛医大だより

加藤宏一(昭和23年卒)



防衛医科大学校は昭和49年第一期学生が入学し、ついで52年12月病院が開院された。所沢市の中央部に位置し、約29万㎡の敷地に完備した教育・運動施設・病院などが設けられていた。現在第一・二期生が卒業し、医師国家試験の成績は全国ベスト5に必ず入っている。入学競争率は50・60倍台で、全国から優秀な学生が集まっている。防衛医大病院は、西武新宿線新所沢駅より一軒の場所であり、所沢までは新宿より45分、池袋より25分、実質的には東京西郊通勤圏で、住民の80%は東京通勤のサラリーマン家庭である。敷地の旧米軍基地跡には、防衛医大を始め、国立リハビリテーション・センター、環境庁公害研修所、公園団地、市総合スポーツ・センター、所沢市の全公共施設が新設移転し、広大な航空公園とともに、一見欧米の新興文化都市に似たような明るく、広々とした雰囲気のある地域をつくりあげている。

狭山ヶ丘丘陵にある所沢市にはこの他狭山湖、西武園、西武球場などめぐまれた森林が存在し、早稲田大学の移転も決定している。最近所沢駅と新所沢駅の間地点

化で、三、四年に一回となつていく。若い同窓会員の御来道、御入会を切に望んでいる。

の患者数は非常に多く、年間分娩件数は全国国立大学病院ではNo.1、婦人科手術でも豊富な症例を経験出来る。永田一郎助教授(千大昭35年卒)は手術の名手であり、研究は生化学的に分娩発来機構の解明をやっている。菊池義公講師(千大昭41年卒)は、卵巣癌の免疫学的方面で、関克義講師(千大昭43年卒)は、内分泌研究では名を知られている。木沢功病院講師(千大昭46年卒)は、血液および卵巣癌の免疫化学的方面の研究に努めている。国立大学分娩部教授として始めて発令された小林充尚教授(千大昭34年卒・初め産婦人科助教として着任)は超音波診断学の権威である。生理学第二講座は辰濃治郎教授(千大昭34年卒)が主催し、昭和50年3月発足している。以来6年有余、脳波分析、組織培養、実験でんかん、コンピュータを駆使した理論的研究など、當々と実績をあげている。丸学一助手(千大教育学部昭48年卒)は、教授のよきパートナーとして研究を行なっている。

以上千大出身者はまだ少数数であるが、防衛医大の内意気さかんに努力している。今後、どんどん千大より優秀な人材を送り込んでいただきたい。何科を希望されても結構である。所沢の自由な学問の天地で、充分研究し、自分の力を伸ばしてみたいと考えられる積極的な方を、お待ちしております。



高知医科大学

田宮達男(昭和27年卒)

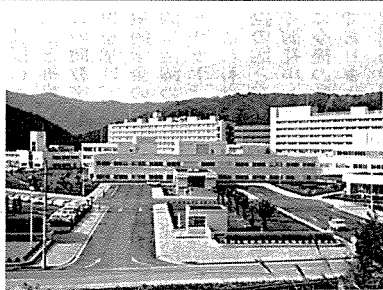


昨年4月1日付をもって高知医科大学第二外科教授として赴任致しました。

本医科大学は昭和51年10月開学、翌年4月第一期生を採用、現在4年次生を最高とする学年進行中の新設大学である。高知県80余万人の宿願「地域医療の向上」を意図して発足した本学は、高知市の中心街、播磨屋橋より東北東約10km、北に四国山系、東に長曾我部氏の居城跡岡豊山を配し、南に香長平野を望む景勝の地に設立されている。

昨年10月12日附属病院が302床で開院、同月19日より診療開始の運びとなった。当初の外來患者数は諸新設医大の約二倍で、現在病床稼働率は93%に達し、地域住民の期待の大きさを裏書きしている。来年4月病床数600の附属病院として完成する予定で、現在その工事が進捗中である。県民の平均年齢が高く、他の新設医大には類のない老年病学科があることが一つの特徴である。又、千葉大学より藤本重義教授を迎え免疫学講座を設

立したことは、初代学長平木潔先生の時代の先取りの発想であった。昨春逝去された同学長は、かねて「敬天愛人」をもって建学の精神とされ、人間愛に根ざした診療を日々行うことの使命を私共に語り掛けられていた。この精神は現森本正紀学長により継承され、私の診療を介しその姿勢が漸次地域住民に浸透しつつあることは、誠に同慶の至りである。



田園風景に囲まれ、緑豊かな八万坪のキャンパスに本学が掲げた最大の構想は、平木、森本両学長の指導のもと、実現に漕ぎ着けた全学電算化であった。床面積六百㎡の電算センターを中心に、医学教育、大学監理、医学研究、外來入院、医事を含む患者診療系及び中央診療系を当初よりすべてオンラインで結び、医科大学に存分の機能を託する構想である。選定機

種は田宮社製である。医学教育課程中3年間電算学の学習が組み込まれている。診療側発生源の処理・入力を当初よりすべて医師、看護婦、事務職員自身の手で行うことを前提に、全教職員が本計画に参加した。試行錯誤は否めず、予算面などより予期通り機能していないところもあるが、とにかく全学的スケールで電算化が発足した大学はグローバル的にみても例がないといわれる。電算システム決して全能ではなく、かえって不慣れな点も認められるが、全教職員の努力によりとにかくこの実現に成功し、他の諸新設医大の約二倍の診療件数を少人数でこなしていることは特筆に値する。

私共第二外科の標榜診療内容は一般外科、特に胸部外科で、現在20床(西翼病棟四階の50床を泌尿器科、皮膚科、第二外科で混合使用中)、本年秋には約35床、来年4月より定位置である東翼4階に移り50床となる予定である。老人県だけに末梢血管疾患の多いのが目立つ。第二外科の現実動員数は6名で、私の外に、助手3名(貞光武男、山城敏行、北川素)、医員2名(武政厚男、松本孝文)がいるが、2月より研究生、研修生各1名が加わる予定である。なお、本年4月には現千葉大学第二外科講師、小越章平君を助教授に迎え、他講師1乃至2名等をも加え、第二外科科学講座が発足する。

主任教授佐藤博先生をはじめ、千葉大学の多くの教授に深謝の意を表する次第である。又、私をお育て下された中山恒明、鈴木五郎両教授に衷心より御礼を申し上げたい。

国立療養所千葉東病院

森

和夫(昭和26年卒)

国立療養所千葉東病院は、千葉市の東南方、国鉄千葉駅より大綱街道を約5キロの地点に位し、いわゆる「仁戸名の森」としてなお緑豊かな高台に、千葉県がんセンター、県立精神衛生センター、県衛生研究所、千葉社会保険病院などと隣接して一大医療地区を形づけています。

(昭和13卒)を経て、56年4月より金子兵庫先生(昭和19卒)が院長となられ現在にいたっています。当初結核病床訓令800床として発足した当院も、他の療養所と同じように結核患者の減少により、施設整備完了時は600床として昭和43年に実質的な統合を完了しました。

その後新たな機能付与として、昭和47、48、50年の各年度にわたり重症心身障害児病棟が新設されました。

またさらに結核病床の減少による病床転換として、昭和49年に小児慢性病棟が開設され、慢性腎炎、ネフローゼ患児の入院をみ、同時にこの児らに対する教育として、初め一名の訪問教師をはじめられた院内学級も、その後松ヶ丘小、中学校の特殊学級を経て、昭和52年には県立仁戸名養護学校が、旧千城園管理棟を利用して開校しました。その後昭和54年度全障害児教育の義務化にともない、重心児教育もはじめられ、教員数が飛躍的に増加、病院敷地内に新らしく校舎が建築され、56年9月には高等部を含めた近代的な養護学校が完成し、名実ともに病弱教育の県下の一大拠点となりました。

結核以外の新たな機能付与としては、さらに千葉大整形外科井上教授の絶大なバックアップにより小児脊椎椎間疾患(主として側弯症)の治療がはじめられ、昭和55年には外來が、56年3月より病棟が開設され、その手術も積極的に行われています。このことにより前記小児病棟を中心とした小児腎疾患の管理、整形外科による小児脊椎側弯症の管理をあわせて、学校保健の第3次医療機関のセンター的役割を果しつつあります。

昭和55年に、不幸にも相次いで、山室信朗(昭和19卒)、市川順三(昭和15卒)先生の両先輩の急逝をみ、また56年に入り比留間政一(昭和16卒)、後藤繁(昭和19卒)、前田正治(昭和16卒)諸先生の御勇退があり、長く結核医療の最前線で働いておられた方々が去られ、さらに結核患者入院の急激な減少をみあわせて、56年金子院長の就任とともに、非結核呼吸器疾患の治療をはじめめることを企図し、千葉大肺研渡辺昌平教授の御指導により、さしあたり2名の医師の派遣が得られ、非結核病棟開設も近々実現し、また新しいもう一本の柱の建設が初まりつつあります。近い将来県がんセンターとともに、県下肺癌治療の拠点となるべく整備を進めてまいります。

この様に本院は既設の病床を利用するとともに、55年度のリハビリ棟、小児・整形外科棟の新築、56年度研究検査棟の増築など着々新しい機能の充実をはかっていますが、千葉大学に近く、また県

第一内科 奥田邦雄教授

開講10周年記念会開催

本年が第一内科教室では奥田教授の開講10周年にあたり、これを記念して去る1月23日千葉ニューパークホテルで祝賀会を催しました。当日は、千葉医学会、第一内科同門会例会を行い、同門会員による研究発表があり、ひき続いて前東大教授、上田英雄先生による「肝臓病研究の回顧」と題した記念講演がもたれました。上田先生は肝臓病学会の最長老で、現在も中央鉄道病院長として御活躍中で、第一内科とは三輪名譽教授以来関係の深い方でありました。御自身の経験を通してみた肝臓病学の歴史を淡々と語られ、感銘深い講演でありました。

記念講演に続く懇親会では学内

書評

大腸疾患の臨床

都立広尾病院副院長矢沢知海氏（昭和26年卒）はこのほど表記の著書を出版した。山田明義氏（昭和34年卒）外二名の共著になる662頁からなる膨大な著書である。矢沢氏は本学卒業後第二外科において、中山恒明教授に消化器外科学を学び、東京女子医大教授を経て都立荏原病院から現職に進まれた方である。中山教授から大腸・肛門の外科を専攻するよう命ぜられ、

外の諸先生方と同門各位の多数御列席のもとに、井出医学部長や渡辺附属病院長の御祝詞をいただき、関係者一同大変光栄に存じた次第です。この10年間は丁度学園紛争ともからんだ変動期にあたり、奥田教授にも苦勞の多い期間であつたかと推察しています。しかし、この間教室の研究業績も着々と成果を挙げ、最近では教授が国際肝臓病学会の会長を務めるなど国際的に活躍の場を広げている状況にあります。

これも学内外の諸先生方の御支援の賜と存じ、10周年にあたり厚く御礼申し上げるとともに、さらに今後の教室の発展を期する次第であります。（大藤正雄記）

今日まで多くの臨床経験を積まれており、この分野における指導的立場にあることは周知のことである。本書は大腸疾患のX線検査・内視鏡検査・症候論にはじまり、先天異常・炎症性疾患・腫瘍性疾患・手術術式まで多くの経験を生かして、詳細にまとめられている立派な著書である。

近年大腸疾患が急増加しつつあり、臨床医は日常大腸疾患を取り扱わねばならない現在、臨床医、学生にも一読する価値ある著書とと思う。

（金原出版・定価三万二千元）

（前頁より続く）

がんセンターを初めとする多くの医療施設が隣接しているという立地条件にめぐまれていたため、これらの全面的な御協力のもとに、療養所としての特色ある医療を充実させていく方針です。

現在本院は、結核8病棟（内1病棟は近く非結核に転換の予定）、小児慢性疾患2病棟、小児整形外科1病棟、重症病棟3病棟で運営されていますが、医師として本学出身者は、院長金子兵庫（昭19卒）、副院長森和夫（昭26卒）、麻酔科医長若山亭（昭24専門部卒）、外科医長東郷七百城（昭33卒）、整形外科医長大塚嘉則（昭39卒）の他、整形外科に南昌平（昭48卒）、磯辺啓二郎（昭52年卒）、呼吸器科に河内文雄（昭50卒）の若い先生方が入られて、平均年齢もぐつと若がり新しい機運がもたらがっています。

広大な千葉療養所・千城園の敷地が統合により減少したとはいえ、なお十四万平方メートルの広い敷地を有し、構内には、樹齢三十年をこえる松杉などが繁り、春には桜、八重桜が咲きほこり、夏には種々の草花が咲きみだれ、秋には果の木がたわわに実をつけるなど、千葉市内とは思えない自然が残されており、この環境が入院患者・患者の療養に好適であると同時に、職員を心をなぐさめています。

今後とも、当院の医療の充実のため、千葉大学、同窓会の諸先生方のつよい御支援をお願い申し上げます。（なお写真は昭和51年現在のものです。）

計報

小篠 曜氏	(昭20卒)	55	
西川 喜作氏	(昭30卒)	56	10・19死亡
熊坂 順彦氏	(昭30卒)	56	8・死亡
石田 俊孝氏	(大11卒)	55	9・21死亡
江沢 義彦氏	(昭11卒)	56	11・6死亡
国分 信氏	(昭18卒)	56	11・9死亡
加藤 専一氏	(大5卒)	56	7・27死亡
布目 貫一氏	(昭11卒)	56	8・28死亡
志田 律三氏	(昭19卒)	56	11・24死亡
久貝 貞治氏	(昭2卒)	56	12・4死亡
中安 清雄氏	(明39卒・不明)		
谷口 恒郎氏	(昭14卒)	57	1・7死亡
大門 桃介氏	(昭15卒)	57	1・20死亡
海宝 仁氏	(大14卒)	57	2・6死亡
中平 清澄氏	(大6卒・不明)		
松下 富夫氏	(昭16卒)	57	1・12死亡
谷口 益郎氏	(昭9卒)	57	2・25死亡
湯浅 直己氏	(昭6卒)	56	年死亡
亀田 威夫氏	(大6卒)	57	1・13死亡

西連寺 確氏 (大元卒) 57 2・13死亡

木村 昌義氏 (大8卒) 57 2・23死亡

稲葉治三郎氏 (明38卒) 56 3・5死亡

中島 勉氏 (明36卒・不明)

齊藤 達也氏 (大10卒) 52 10・9死亡

比企 能夫氏 (昭7卒) 56 10・死亡

浅野 修氏 (大13卒) 54 10・25死亡

上條 清作氏 (大6卒) 56 7・25死亡

浦屋 経宇氏 (昭32卒) 57 1・24死亡

吉田 久範氏 (大10卒) 56 12・29死亡

富田 進氏 (昭25卒) 55 11・7死亡

三枝慶一郎氏 (昭26卒) 57 1・25死亡

藤縄 謙蔵氏 (昭12卒) 57 3・6死亡

喜多浦哲宗氏 (大7卒) 57 3・8死亡

沼田 克己氏 (大12卒) 56 5・7死亡

腰塚 衛氏 (昭17卒) 57 4・4死亡

編集後記

○新緑の候となりました。同窓会報80号をお送りします。本号にも皆様から多数の原稿を頂戴しまして、六頁となりました。海外をも含めて、各地で会員諸兄が活躍の様子をお慶び申し上げます。本年度内に新名簿が編集されます。住所変更その他お気付きのことがありましたら、事務室までご連絡下さい。

○先般中華人民共和国衛生部からの招きがあり、短期間ですが外遊して参りました。北京に三日滞在中に話題の中日友好病院の建設現状も見学して来ました。多くの日本人の建築関係者も忙しく立働いており、地下工事がほぼ完了したように聞いております。次号にでも印象記を書かせて頂きます。

○本年度の同窓会総会は、6月19日（土）に、千葉グランドホテルにて開催されます。各地のあのはな会は盛会ですが、年一回の総会は、いつも林しい次第です。集會委員は学術講演その他で苦勞しております。毎年面白い話が聞かれます。多数ご出席のほどご案内致します。

（奥井勝二）

あのはな同窓会総会

来る6月19日（土）午後3時30分

会場 千葉グランドホテル
講演、懇親会等の詳細は後報